

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

日本映画を代表する映画監督のひとつである小津安二郎さんの特徴的なロー・ポジションによる撮影や厳密な構図などが特徴的な「小津調」と呼ばれる

映画のなかの老人のよう  
うに、ゆっくり歩きながら、連れの人とゆったり話しかけたいと想う秋日和を感じる時期となった。

今は「蟋蟀在戸(きりぎりす)にあり」戸口で秋の虫が鳴く頃だが、コロギと漢字検索すると蟋蟀の文字。当時のキリギリスもコロギなのだろうか。ひんやりした夜気の中、にぎやかにエンマコロギが鳴いているが、鳴くのは雄で雌への求愛だという。

コロコロコロと鳴くと秋田魁新報コラム北斗星さんが紹介している。受精した雌は長い産卵管を地面に突き立て卵を一粒ずつ産み、成虫は冬になると死んでしまふ。卵はそのま

ま地中で越冬し春にふ化するが、農地が荒廃し天敵の鳥類やカエル・カマキリも多く繁殖し、鳴き声が悲鳴に聞こえそうだ。

## 小規模経営者には絶えず知恵と工夫が求められている

よく大を制す、柔よく剛を制すと言えば、現役時代の舞の海の代名詞で、小兵力士が大柄な力士を倒す取組は楽しみにでもあった。特にのちの横綱となる体重差103キの曙との取組、内掛けで下した一

番は記憶に残る。登壇した舞の海さんは、相撲取りだった印象は全くなく均整の取れた体格に驚く。講演で「大相撲はスポーツではない。スポーツであれば、公平を旨として体重による階級が設けられる。大相撲は古来、受け継がれてきた伝統文化であり、芸能であり、神事」と話す。微妙な土俵の大きさが、工夫次第で感動するドラマを誕生させる。豊富な経験に裏打ちされたユーモア溢れる話術が講話を盛り上げる。参加者は小規模経営者も、事業規模の大きな事業者に対して戦略に悩む状況に舞の海の状態を当てはめて知恵と工夫を練らなくてはと考えたはずだ。「立ち合いでケガをして土俵下でしばらく動けない力士には、



引退してからも相撲解説や多くのCMでの活躍で開場30分前には大勢の聴講者で会場の熱気が高まる。

興行では流れがあり場が冷めるから礼をして引き揚げさせるべき」などの苦言に批判もあるが、発言からは相撲を本当に愛していると感じた講話でもあった。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)